

Practice to connect with the city in International Art Exhibition : A Case of “Trolls in the Park 2019”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水谷, 俊博 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1285

国際アート展における街とつながる実践 トロールの森 2019 を事例として

Practice to connect with the city in International Art Exhibition
: A Case of “Trolls in the Park 2019”

水谷 俊博*1
MIZUTANI Toshihiro*1

地域計画 街づくり 自然環境
アート展 インスタレーション ワークショップ

1. はじめに

東京都立善福寺公園を主会場として年に 1 回開催される国際野外アート展、「トロールの森」（主催：「トロールの森」実行委員会、後援：東京都、杉並区、杉並区教育委員会、助成：杉並区文化事業助成事業）。2002 年にスタートし、2019 年は 18 回目の開催となる。

「トロールの森」は、都心部の施設内部（美術館等）等で開催される通常のアート展と違い、都立善福寺公園から JR 西荻窪駅周辺までを中心とし、街中フィールドに展開されることが大きな特徴であり、善福寺公園で開催

催される屋外アート展示と並行して、野外劇や街とリンクした「野外×アート×まちなか」というアートイベントが様々なかたちで展開されている。

2. トロールの森 2019 概要

「トロールの森 2019」は善福寺公園の屋外展示に 27 作家の出展、屋外劇場の演目に 10 アーティストの出演、まちなかアートイベントとして 29 のイベント企画が開催された。開催会期は、2019 年 11 月 3 日（日・祝）～11 月 23 日（土・祝）。



■ 善福寺公園上池東岸サイドにおける作品展示風景

*1 工学部建築デザイン学科教授



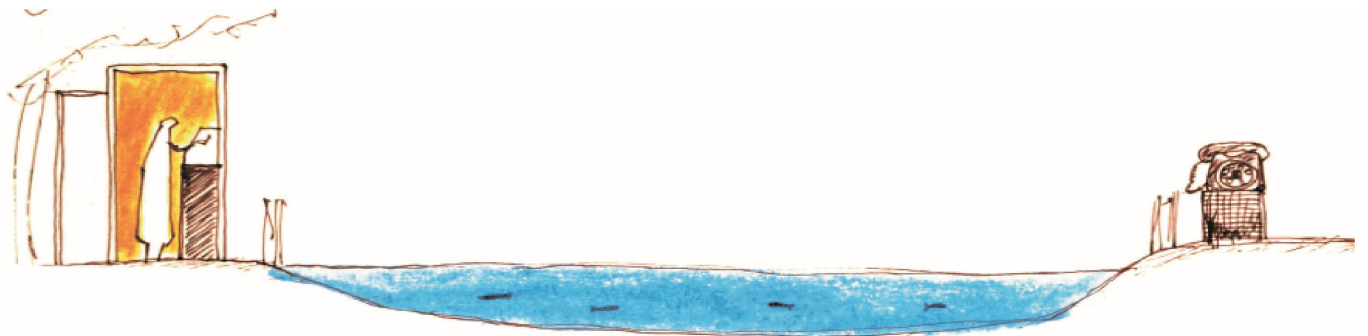
■善福寺公園上池西岸サイドにおける作品展示風景

「トロールの森」2019年のテーマは「囁き whispers」。木々のそよぎ、水面をわたる風、虫の羽音、等を多様な囁きになぞらえ、また、街中の雑踏や歓声にかき消されそうな小さな音、耳元のひそやかな声に関する人々の意識を作品として問うことを、アート展全体のテーマとして求められた。

「トロールの森」には2013年より出展を継続しており、2019年の本展示で6回目の出展となる。今回は「武蔵野大学水谷俊博研究室」名義で出展し、①『Come Talk To Me』という野外作品展示と、②『未確認生物との行進／交信』というまちなかアートイベントへの出展、及びパフォーマンス参加を行った。

3. 野外展示作品概要

野外展示作品『Come Talk To Me』は、テーマ「囁き」をベースとし、自らの本心の在りどころについて考えるきっかけとして、現在ではほとんど見る事のなくなった「公衆電話」と「黒電話」というデバイスを対岸に設置し関係性を持つという、参加体験型のインスタレーション兼アート作品である。現代人のスマートフォンやイヤホンへの依存、そこからうまれる周囲への無関心性にフォーカスをあて、「公衆電話」と「黒電話」という、現在ではみかけなくなった景を自然豊かな公園内に創り出すことによって、コミュニケーション（声＝囁き）のあり方を改めて見直す場を提供する作品となっている。



■2要素の関係性を表現した作品コンセプト図

作品は、善福寺公園上池の中央部入口付近に公衆電話ボックス、対岸の上池西側クヌギ広場付近にちゃぶ台と黒電話が設置されている。750mm×750mm×H2000mmの公衆電話ボックスフレームがあり、扉を開け中に入ると、真っ赤な公衆電話が置かれている。その横には、電話をかけるための丸い木製コインと、自らの本心を書くためのテレホンカードに見立てた3mm厚のバルサ板が積まれている。来場者は、公衆電話にコインを入れ、耳の形をした受話器（木製）に向かってまず自分の本心を囁き電話をかける。すると、対岸側にある黒電話が疑似的に鳴る仕組みになっている。その後、本心をテレホンカードに書き投函し、時間が経つと、対岸にあるちゃぶ台に、黒電話とともにカードが散りばめられる。囁きを書くという行為によって、日頃感じたことの無い自分への気持ちを確認するとともに、自分以外の人への思いを体感できる。特に、公衆電話や黒電話を使ったことがない世代の子供たちには、新鮮な体験をうみ出した。

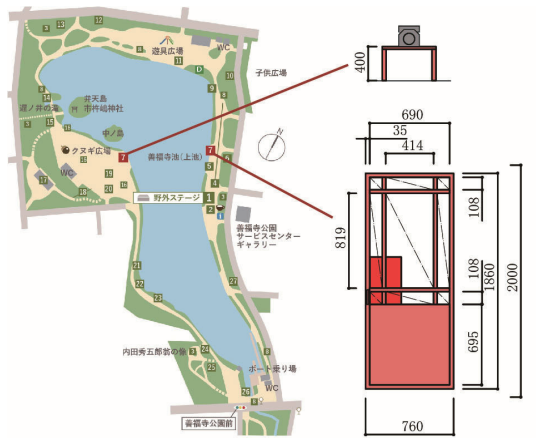
公衆電話ボックスの扉は蝶番により開閉し、ボックス空間に入ること、フレームのみの開放感の中にわずかにある閉塞感が、より自分と向き合う空間を生みだしている。また、公衆電話本体には、コインを入れる穴とテレホンカードを入れる開口があり、プッシュボタン

を（疑似的に）押す仕組みが装備されている。対岸の黒電話も、（疑似的に）ダイヤルを回し、受話器を取ることができ、実際の操作性を近似的に体験することで、普段なじみのない行為が反転したリアリティを与える。

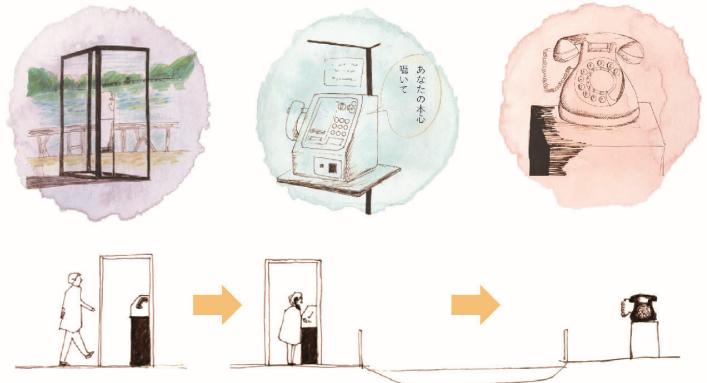
4. まちなかアートイベント概要

トロールの森まちなかアートイベント「つなぐプロジェクト」では、善福寺公園から西荻窪駅までを練り歩くパフォーマンスを行った。会期中、11月3日（日・祝）、10日（日）、17日（日）の計3回の開催となった（17日は武蔵野大学環境学演習における活動として3年生との合同パフォーマンスを行った）。

本パフォーマンスのテーマは『未確認生物との行進/交信』である。パフォーマー4名が扮した未確認生物たちは、地球観光とニシオギの人々と仲良くなるという目的を果たすため、西荻窪エリアに降り立つ。彼らはそれぞれが機体（衣装）に乗っていて、言葉を話せないため、通訳ができるガイドが西荻窪のまちを案内するという設定になっている。そして言葉を話すことができない未確認生物と街の人々との交流する手段は、「アート」というストーリーになっている。彼らの機体（衣装）に街の人々が触れることにより何等かの手を加える（＝人間の



■作品配置図（左）、立面図（右）



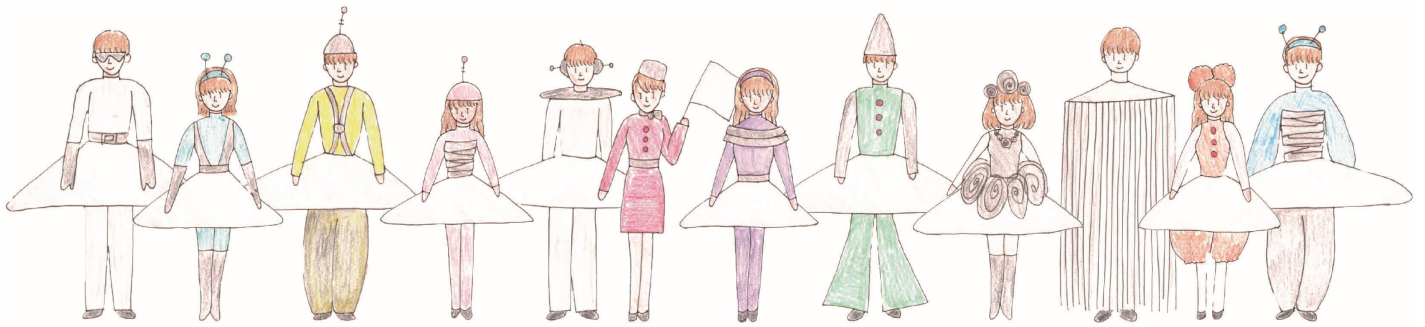
電話ボックスに入る 電話をかける 台座部分に囁きコインを掲示
 ■作品における体験アクティビティイメージ図



■作品（疑似公衆電話）に接する子供たちの様子（左）



参加者が記した板が作品に積層されていく様子（右）



■街中パフォーマンス（未確認生物等）衣装イメージ図



■西荻窪駅（左）、街中行進（右）パフォーマンスの様子

痕跡を残す）ことによって新たな形態に装いが時間経過とともに変化するという参画型のパフォーマンスである。

具体的には、未確認生物たちの機体部分は、ワイヤーで膨らませた布を幾重にも重ねることによってつくられている。機体部分はベルトで固定し、また未確認生物・ガイドの衣装・装着小物のデザインや配色を微妙に異ならせながら、統一性のあるデザイン計画とした。街の人々と会話できるガイドが1名、未確認生物が4名での計5名ユニットでの行進パフォーマンスを行った。

スタートの善福寺公園からゴールの西荻窪駅に着くまでの間に、出逢った街の人々にそのワイヤーを変形してもらうことで、機体に痕跡を残し、街の人々と交流することを目的としている。

また、今回は建築学演習の活動一環により「トロールの森に肖る」というテーマから、提案作品に対して会期中に新しい企画を立て、作品に付加することにより更に作品のクオリティを高める実践をおこなうプロジェクトに挑戦した。付加したテーマは『未確認生物を追う記者・パパラッチ』。宇宙人に先行して街へ向かい、善福寺公園付近で未確認生物の目撃情報を集める「ビラ配り」

隊と、未確認生物の行進の後ろについて歩く「記者・パパラッチ」がパフォーマンスを挟み込み、パフォーマンス本体のヴォリューム及び多様性を高める仕掛けを組み込んだ。会期中計3回の行進を通して、西荻窪の街に突如現れた未確認生物（とパパラッチの隊）は、トロールの森、そして西荻窪の街全体をさらに盛り上げ、街とアート祭の関係性を更に繋げる役割を果たした。

5. おわりに

『トロールの森』は、アートという媒介を介して、公園から街全体を繋げるという特徴的な国際アート展である。研究の一貫として野外作品の出展・まちなかアートイベントのパフォーマンスに出展参画することにより、建築や地域性にとどまらず、街全体を繋げる実践の一活動と位置付けられる。今後継続活動をおこなうことによりアート展とまちづくりの関係性を考察する資料の蓄積をおこなっていく。

謝辞：本稿をまとめるにあたり工学部建築デザイン学科服部雅子(4年)作成の作品報告資料を基に執筆をおこなった。感謝の意を表す。